

- 趣味の作品展・かるた大会／東栢山公民館
- 大豆の選別／桜井小3年
- どんど焼き／各自治体

地域交流 地域の歴史

たのしむ

趣味の作品展・かるた大会

by 東栢山公民館

絵手紙・水墨画・鎌倉彫・絵画・明治/大正時代の写真・習字など

普段趣味で作っている趣味の作品、教室に通って作り上げた絵手紙、水墨画、鎌倉彫、外国旅行でのスケッチを基にした絵画、身近な酒匂川の絵や写真、そして歴史を感じさせる明治・大正時代の写真、平成30年度は明治43年の酒匂川の氾濫後の写真もありました。子供たちの習字や絵の作品もあります。翌日には小学生のカルタ大会もありたくさんの賞品が用意されました。是非参加してください。

●時期▶1月中旬 ●場所▶東栢山公民館 ●主催▶東栢山公民館



尊徳学習 地域交流

まなぶ

大豆の選別

桜井小3年

自分たちが種をまいた約400粒の大豆はいくつになっているのかな。



金次郎さんもこうして油菜の種を増やしていたんだなあ

みんなで数えながら、きれいな大豆と虫に食べられたりして変色している大豆に分けました。津久井在来大豆だけでこの時点では

18,459粒。この大豆は2月にみんなで豆腐やきな粉を作って味わう予定です。また、大豆作りでお世話になった地域の方を招いて、「大豆収穫感謝祭」も予定しています。

小学校3年生頃からもらった小遣いをためておいて、小田原の町に活動写真(映画)を見に行くのが唯一の楽しみであった。東栢山から2里(8km)ほどテクテク歩いて小田原の北端の「竹の花」にある大正館という映画館で活動写真を見た。その頃の活動写真は、もちろん白黒の無声映画で弁士が一々画面を説明するのである。上映本数は外国もの、時代劇、新派悲劇の3本立てであった。当時大人十銭、子供五銭の入場料だったと記憶している。



お正月

家柄によって金額の違うながしのお小遣いをもって正月遊べるのは、元旦、二日、三日、五日、七日、十五日の六日間である。

よそいきの着物を着て、新しい下駄と足袋をはいて、男の子はさいのかみ、コマ回し、女の子は羽根つき、カルタ、すごろくなどをして遊ぶのが正月の風物であった。

家々は屋敷の入り口に松と竹を組み合わせた門松を立て、玄関、神棚にいたるまで、しめ縄やお飾りが置かれ、生活に縁のあるところに大小二つのお供え餅が白紙を敷いて供えられた。



昔を知る

さいのかみ 歳の神

子どもにとって最大のお祭り行事

- 7日 15歳以下の男の子全員が栢山神社の境内に集合。餓鬼大将(13歳の男子)を先頭に80軒の各戸から門松、暮れのすす払いの笹竹、神棚のお飾り等を引きずって道祖神の一角に積んでおく。
- 14日早朝~午後4時 「さとばらい」(団子焼き)の当日。指定の場所に道祖神のムロの材料を運び、ピラミッド形に積み重ねる。ムロに火を入れる。村中の大人も子供も女も竹の先に団子を差して真っ黒に焼き上げる。
- 8日晩~13日晩 毎晩14,15歳の者が「さいのかみ小屋」に集まる。ローソクを灯して炭火で餅を焼いたり、みかんを食べたりする。これが一番の楽しみ。
- 15日 後片付けをした後。15歳の者は歳の神宿に招かれて子供時代にお別れの元服膳が出される。その後... 13歳の餓鬼大将以下全員に、昨日もらった団子のお汁粉が振る舞われる。
- 13日晩 餓鬼大将(13歳)が主役。3~4人お面をかぶったり、顔に白粉やすみを塗り、短い竹の先にしめ飾りをつけ、各家を一軒毎に「悪魔ばらい」を連呼しながら廻る。

文化継承 地域交流

つなぐ

どんど焼き

by 各自治体

自治会や地域内の諸団体が一致協力して実施してゆきたい。



稲田に7m四方位の不燃材を敷き、丸太や正月飾りを燃やします。来場者は持参の団子を竹竿につるして焼き、食べるにより一年の無病息災を願います。成人、お年寄りは無事に年中行事を成したと、また、大人の話聞いて習字の燃えた灰が高く上っていくことで習字の上達を願う子どもの姿も見受けられます。

世代間の継承と同時に、子どもは普段なじまない火炎に驚きつつも、貴重な体験をしたことを喜んでいました。自治会内では数少ない年中行事の一つで、住民が一同に集える機会であり、それまで挨拶も交わしたことがない地域の方とこれを機に挨拶するようになり、日常生活の一角を共有できる様になればと思います。毎年1地区200人程度の参加者があります。

七草

春の七草とはどんな草なのか。七草粥の故事来歴も知るよしもなく、一月六日庭の畑の草根を抜いてくるのと、川辺にある「せり」をつむくとを母に言いつけられる。

東栢山では「七草なすな、唐土の鳥と日本の鳥が、合わせてパタパタ」と唱えて包丁を右手に、左手にすりこぎを持ち叩いて七日粥を作る。

私の家では餅を入れて味つけた「おじゃ」を仏壇に供え、夕飯代わりにこれを食べるのがならわしだった。

蔵開き

神仏に供えたお供えを割ってお汁粉をつくり食べるのは蔵のある家くらいで、多くは割ったお供えを焼いて砂糖にひたして食べるのが一月十一日の行事であった。

普通の餅より、この焼いたお供え餅の格別のうまさがあるが今もって思い出の中にある。

